

チャットにおける日本語母語話者の調整 —母語場面と韓国語母語話者との接触場面の比較から—

稲葉 和栄

1. はじめに

母語話者の調整はこれまでフォリナー・トーク研究(以下、FT)として数多くの研究がなされているが、その多くは対面を対象としたものに集中している。しかし、近年の技術進歩によってコミュニケーションの形態は多様化してきており、コミュニケーションがおこなわれる場面の特徴によって、母語話者の調整もまた異なると考えられる。そこで、本研究ではチャットを取り上げ、そこでおこなわれる母語話者の言語的・相互行為的調整の特徴を明らかにすることを研究課題とし、先行研究で明らかにされている結果と対照することでその調整の特徴をチャットの場面的特性と合わせて分析した。本研究は、今後、特に日本人とのコミュニケーションの場が限られている海外の日本語教育の現場で新たな学習ツールとしてチャットの導入を検討する際に学習者がどのようなインプット受ける可能性があるかの示唆できるという点で現場への還元を目指す基礎研究と位置づけられる。

2. 先行研究

2.1 チャットの言語的側面に関する先行研究

Yates(1996)は英語のチャットでのやりとりを話し

ことばと書きことばと比較し、チャットはどちらかに似ているのではなく独自の特徴を持っているとしている。

他メディアと比較したチャットの場面的特性は表1のように整理できる。

インターアクションに関する研究としては、意味交渉など第二言語習得の立場から研究をおこなったもの(Blake2000、Pallettieri2000、Toyoda & Harrison2002、Tudini2002、Smith2003)、ターン・テイキングなどの発話交換に関するもの(細馬2000,2002、水上・右田2002)、会話の構造(伊藤2002)などがあり、実際の授業にチャットを導入した報告(山下2002)もなされている。語学教育の立場からは、Pelletieri(2000)が言語習得に有効とされる意味交渉がチャットでも会話同様におこることを示し、チャットが第二言語習得に有効なツールであることを報告している。言語教育の立場からチャットを扱っている研究は数が限られ、母語話者の調整について言及したものは管見では見当たらない。

表1 チャットの場面的特性

	チャット	対面	電話	電子メール	手紙
空間共有	なし	あり	なし	なし	なし
主な情報モダリティ	文字(パソコン)	音声	音声	文字(パソコン)	文字
視覚情報	少	多	なし	少	中
同期性	高(ズレあり)	高	高	低	低
記録性	あり	あり	一般的になし	あり	あり

2.1 母語話者の調整に関する先行研究

日本語におけるFTの研究は、スクータリデス(1981)、志村(1989)、坂本他(1989)、ロング(1992)、オストハイダ(1999)など多数の研究がある。うち、

ロング(1992)はFT使用型の分類として「語彙面」「文法面」「音声面」「談話面」を挙げ、志村はLong(1983)の主張に依拠し、FTと母語話者同士の会話を言語学的修正と相互交流的修正に分け質的・

量的に比較分析するという手法で日本語の FT の特徴について分析をおこなっている。

また、書きことばにおける母語話者の調整に関しては、FT に対して一部で「フォリナート・ライティング」という呼び方もされている。音声以外を対象としたものには、伝言メモを扱った鄭(1999)、手紙を対象とした大平(2000、2002)、杉村(2003)、メーラの徳永(2003)などが挙げられる。

3. 調査方法と実験デザイン

MSN メッセンジャーを使用し、日本人 1 群 (以下 NS1) - 韓国人群 (以下 NNS) [接触場面 15 ペア]、日本人 1 群 - 日本人 2 群 (以下 NS2) [母語場面 15 ペア] に分かれ 1 対 1 で、絵の間違

い探しをするタスクをおこなった。うち、日本人 1 群の接触場面と母語場面におけるデータを分析対象とし、両場面を比較した。つまり、同一母語話者が母語場面に比べ接触場面ではどのような調整をおこなっているのかを比較できるようにした。NS1 の使用タスクは 1 度目と 2 度目では間違いの箇所が異なるものを使用した。被験者の組み合わせは図 1 の通りである。調査協力者は各群ともに 20 代と 30 代で、男女比は NS1 が 6 : 9、NS2 が 5 : 10、NNS が 5 : 10 である。親疎関係を統一するために、調査協力者は初対面で約 15 分の自由会話のあと調査を実施した。

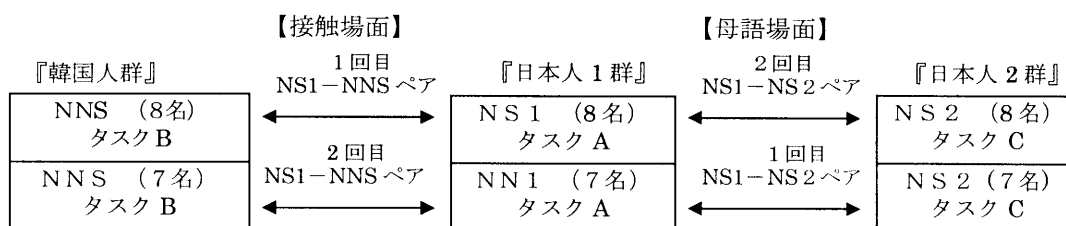


図 1 被験者ペアと使用タスク

4. 分析方法

志村(1989)、ロング(1992)、杉村(2003)の調整の枠組みを援用し NS の調整を言語的調整と相互行為的調整の 2 側面から分析する。言語的調整に関しては、「語彙面」9 項目、「文法面」3 項目を設け、新たに「視覚面」2 項目を設け分析対象とした。相互行為的調整では、本調査で観察されたストラテジー 5 種、タクティクス 6 種、両者の混種 6 種を接触場面と母語場面で比較した。各項目については、日本語教育の専門知識を有する日本人 2 名と 8 割以上の一致率を出した。

5. 結果

5.1 言語的調整の結果

訳語・臨時借用語・同義語による言い換え・積義の使用・相互行為的調整が接触場面でもり多用されていたことは、対面における FT 研究の結果と一致した。また、接触場面では疑問文の使用割合が有意に高く、さらに Yes - No 疑問文を多用して NNS 使用の負担を削減する調整が取られる傾向にあった。これは相手の反応を即時に対応する事中調整であり、「同期性」を有する場面に共通する調整と考えられる。しかし、メッセージを読み、理解し、応答メッ

セージを考え、文字入力し、送受信するという一連の行程が必要なチャットは、対面と同等の同期性を有してはいない。この同期性のズレが、先行研究では母語場面で文がより長く複雑になるとされているのに対し、チャットでは両場面に有意差がなく、どちらの場面でも短く単純な文を使用することによってテンポよい会話展開を促すことにつながっていると考えられる。また、送信までの行程でメッセージを吟味し修正できるため、非文はほとんど観察されなかった。

「文字言語」によるやりとりという特性では、『台形はだいのこと』のように、漢字や外来語をひらがな等で表記しなおす調整がとられた。この他に、漢字をパソコン(PC)の変換機能を使ってひらがなに直しその読み方を確認する、漢字変換されることによって自分の表記が正しいか確認する、といった PC 機能を NNS に教えることによって、よりスムーズな会話を図ろうとする NS の調整も観察された。一方で、NS・NNS 共に「台形」という漢字を使用し会話が進行していったにもかかわらず、最後に NNS が「台形」の読み方を確認する例も観察された。フォローアップインタビューで NNS は、コピー・貼り付けというパソコンの機能を使用する

ことによって、漢字の読み方がわからないまま会話を進行させていたことが明らかになり、パソコン機能が語彙や漢字学習に及ぼしうる長短所が示唆された。また、『三角は△のことです』のように、PCの限定された入力機能を利用し視覚的な調整をおこなう例も多数観察された。

会話文で見られるような「発話の繰り返し」はほとんど使用されなかった。これは、やりとりしたメッセージが画面に記録されるというチャットの「記録性」の高さによるものだと考えられる。

この他に、母語場面では、漢字の多様性・漢字の出現率・語の多様性が統計的に有意に高いという語彙に関する調整、チャットと同時にインターネットの翻訳ページを利用し NNS の母語を訳語として使用する調整が見られた他、応答を返すまでの間が「理解困難」や「メッセージの不伝達」といった認識を与え調整を引き出す引き金となっているケースが観察された。言語的調整のうち、統計処理をおこなったものを志村(1989)と杉村(2003)の結果と比較し表2にまとめる。

表2 言語的調整の結果と先行研究との比較

	本調査	志村(1989)	杉村(2003)
漢字の多様性	母語場面で多様 t(14)=4.64,p<.001	—	有意差なし
漢字の出現率	母語場面で頻出傾向 t(14)=2.09,p<.10	—	—
語の多様性	母語場面で多様 Z=-3.01,p<.01	—	有意差なし
文の長さ	有意差なし t(14)=-1.67.n.s	母語場面で高い	母語場面で高い
文の複雑さ	有意差なし t(14)=-1.60.n.s	母語場面で複雑	一部で母語場面で複雑
疑問文の割合	接触場面で極めて高い Z=-3.19,p<.001	接触場面で高い	—
疑問文のうち Yes-No 疑問文の占める割合	接触場面で高い傾向 t(14)=2.01,p<.10	有意差なし	—

5.2 相互行為的調整の結果

本調査で観察されたストラテジー5種、タクティクス6種、これらの混種6種のすべての項目において、接触場面での使用割合が高いという結果を得た。母語場面と接触場面で相互行為的調整が同じだけ生じるという帰無仮説の基では、このように全項目で接触場面で高くなるという可能性は2項検定により0.1%以下である。このことから接触場面ではより頻繁に相互行為的調整が起こると言える。

6. まとめと今後の課題

本研究によって、これまで明らかにされてきた母語話者の調整には、場面的特性に依拠するものと共通のものがあることが明らかになり、今後、様々な場面での調整を検証し普遍的な母語話者の調整を検証していく必要性が示唆された。

しかし、本件研究は基礎研究に位置づけられ、母語話者の調整にのみ焦点をあてており、学習者双

方との連続したインターアクションを捕らえきれていないという課題が残る。今後は、コミュニケーションに問題が生じた際にその問題を解決していく連続性のある処理過程を分析対象としていく必要がある。

参考文献

- Blake, R. (2000). *Computer mediated communication: A window on L2 Spanish interlanguage*. *Language Learning & Technology*, 4(1), 120-136. (<http://lt.msu.edu/vol4num1/blake/>.)
- Long, M.H. (1983a) Native speaker / non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, Vol.4, 126-141
- Long, M.H. (1983b) Linguistic and conversational adjustments to non-native speaker. *Studies in Second Language Acquisition*, Vol.5, 177-193
- Pellettier, J. (2000). Negotiation in cyberspace: The role of

- chatting in the development of grammatical competence. In M. Warschauer & R. Kern (Eds.), *Network-based language teaching: Concepts and practice* (pp. 59-86). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Toyoda, E., & Harrison, R. (2002). Categorization of text chat communication between learners and native speakers of Japanese. *Language Learning & Technology* 6(1), 82-
- Tudini, V. (2002). The role of online chatting in the development of competence in oral interaction. In the proceedings of the Innovations in Italian Workshop, Griffith University. (<http://www.gu.edu.au/centre/italian/>)
- Smith, B. (2003). Computer-Mediated Negotiated Interaction: An Expanded Model. *The Modern Language Journal*, 87(1), 38-57.
- 大平未央子(2000)「文字を媒介とした接触場面における母語話者の調整 - 日本語の手紙文を題材として-」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、75-80.
- 大平未央子(2002)「日本語のフォリナー・ライティングにおける社会言語的調整 - ネイティブ・ライティングとの比較および調整のメカニズム - 」『言語文化研究』28、大阪大学言語文化部 211-228.
- 細馬宏通 (2000)「チャットは何を前提としているかーチャットの時間構造と音声会話の時間構造」『身体性とコンピューター』(岡田美智男 (編)), 共立出版, 338-349.
- 細馬宏通 (2002)「相互行為とメディアーチャットという「会話」はどのような時空間構造を持つかー」『相互行為の社会心理学』(伊藤勇・徳川直人 (編)), 北樹出版, 179-197.
- 水上悦雄・右田正夫 (2002)「チャットの会話の秩序ーインターバル解析による会話構造の研究ー」『認知科学』9, 77-88.
- 伊藤芳弥(2003)『チャットの会話における開始部と終結部 - 友人同士による一対一のチャットを対象として - 』お茶の水女子大学修士論文 (未刊行)
- 山下好孝「メッセージングプログラムを利用した外国語指導 - 日本語指導を例に - 」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』第 10 号、93-100
- mrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology : Syntax and morphology*, Oxford : Blackwell. (松本克巳・山本秀樹訳 1992 『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房)
- Deshamps, A. (1980) The syntactical distribution of pauses in English spoken by French students, *Temporal Variables in Speech*, Mouton, 255-262..
- 杉本洋子(2003)『日本語のフォリナーライティング』南山大学大学院修士論文 (未刊行)
- 鄭恵允(1999)「書き言葉による『接触場面』における母語話者側の言語的調整 - 『フォリナー・ライティング』の概念形成に向けて」『第 4 回社会言語科学研究大会予稿集』88-93.
- スクータリデス、アリーナ(1981)「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45、53-62.
- 坂本正・小塚操・架谷真知子・児崎秋絵・稲葉みどり・原田知恵子(1989)『『日本語のふおリー・トーク』に対する日本語学習者の反応』『日本語教育』69、121-146.
- 志村明彦(1989)「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68、204-215
- ロング・ダニエル(1992)「日本語によるコミュニケーションー日本語におけるフォリナー・トークを中心にー」『日本語学』11 巻 13 号、明治書院 24-32
- オストハイダ、テーヤ(1999)「対外国人行動よる言語外的条件の相互関係」『日本学報』18、大阪大学文学部、89-104
- 徳永あかね(2003a)「Foreigner Writing における語彙調整ー日本人学生・留学生のメール交換よりー」『神田外語大学紀要』15、223-247.

いなば かずえ／女子美術大学 山野日本語学校
kazuebaikaw@yahoo.co.jp